

子宮頸がん「誰でもなる」

鹿大・小林教授が講演

ウイルス、女性の6～8割感染



子宮頸がんについて説明する鹿児島大学医学部産科婦人科の小林裕明教授
＝鹿児島市の県医師会館

第30回鹿児島県母子衛生学会の公開講座が鹿児島市の県医師会館であり、鹿児島大学医学部産科婦人科の小林裕明教授が「子宮頸がんから女性を守るために」と題して講演した。小林教授は「原因となる発がん性ヒトパピローマウイルス（HPV）はどこにでもい

て、一生のうち女性の6～8割は感染する」と強調した。

発がん性HPVはほとんどの場合は自然に体内から消えるが、長くとどまった場合、感染者の0・1%が

がんを発症する。「誰でも子宮頸がんになる可能性がある。しかし性交渉などで感染するため、世間から『性病』遊んでいたから」などの誤解が根強く、患者自身が口ににくい」と話した。

子宮頸がんの感染予防ワクチンを接種後に痛みなどの報告が相次ぎ、厚生労働省が2013年から「積極的な勧奨」を中止している

件について「ワクチンの成分と因果関係が証明された副反応はない」と説明。「ワクチン導入前から思春期の女性に現れていた症状が、接種後の副反応だと誤解されてしまった」と話した。

日本小児科学会や日本産科婦人科学会など17学術団体が16年4月、積極的な接種を推奨する旨の見解を出した。「ワクチンはHPVが体に入るのをブロックする。検診で（がん1期の前の）前がん病変の段階で見つければ子宮摘出しないで済む。ワクチンと検診は子宮頸がん予防の両輪」と訴えた。（川畑美佳）